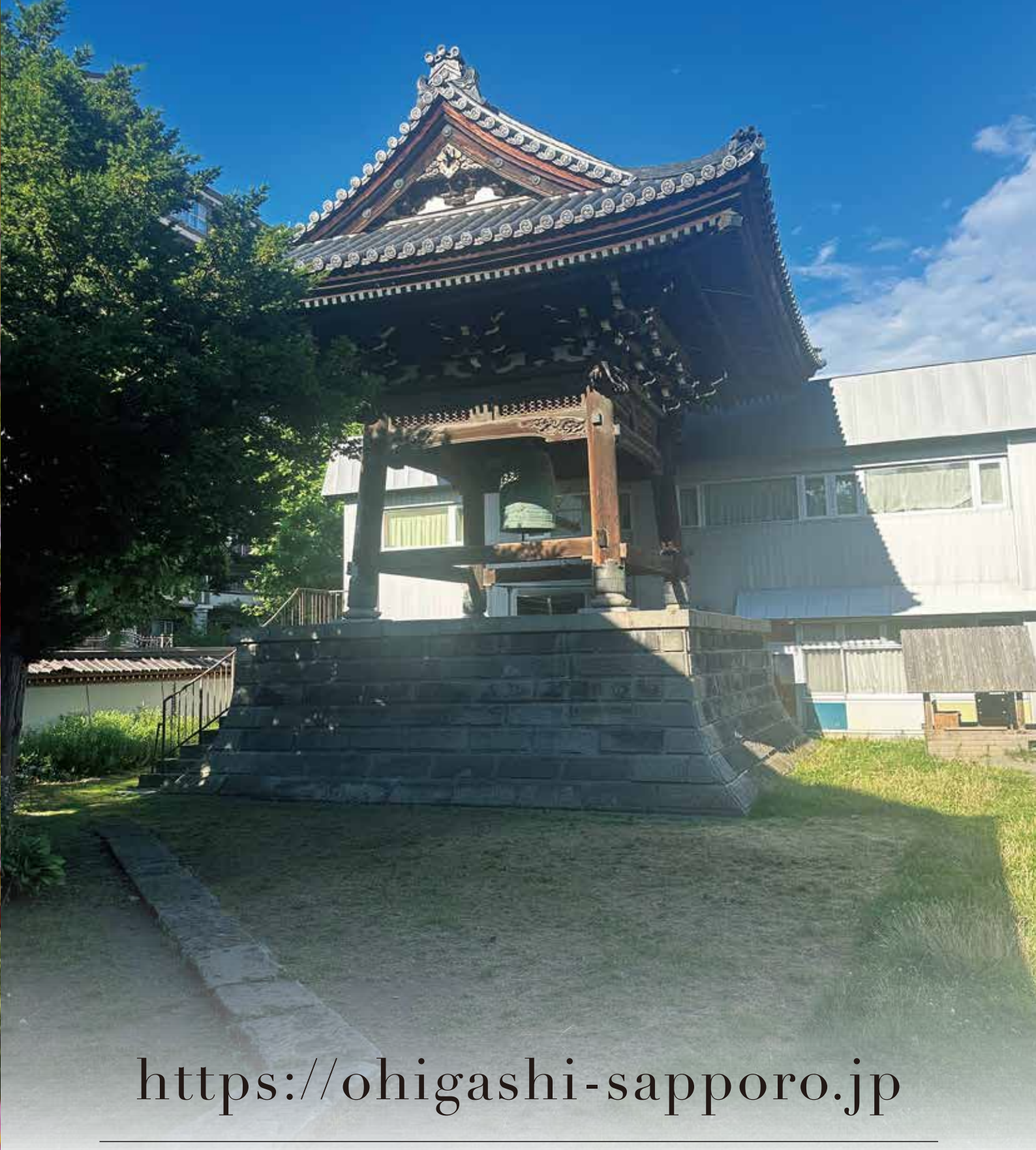


さっぽろ 東本願寺

No.248

2026 9月号

行事報告	01
雲龍柳	02
今月のことば	03
お寺さんに聞いてみよう	04
門徒のおしごと	05
ひがほんっ子だより	06
法話 雲井 一久	07,08
無盡蔵	09
近代から現代の教学者	10
すすきの探訪ツアー	11
ダキシメルオモイ	12
おしらせ	13,14



<https://ohigashi-sapporo.jp>



東本願寺 札幌別院

〒064-0807 札幌市中央区南7条西8丁目290
TEL.011-511-0502
E-mail. ohigashi@abeam.ocn.ne.jp

地下鉄南北線「すすきの」駅で下車
→市電外回り「東本願寺前」徒歩1分

WEBは
こちらから



LINEスタンプ



さっぽろ東本願寺 2026 9月号No.248
(発行人) 真宗大谷派札幌別院
(代表者) 坂田智亮

院議会報告

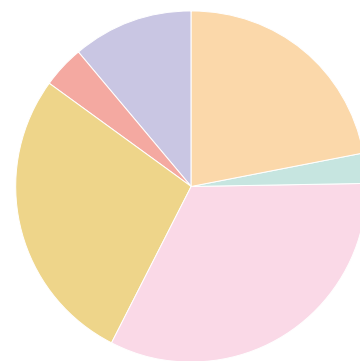
6月19日札幌別院大谷ホールにて2026年度の院議会通常会が開催された。議長には廣瀬智隆議員、議事録署名委員に金浦泰成議員、小山松男議員が選出された。議案は第1号議案「2025年度札幌別院決算書」、第2号議案「2026年度札幌別院経常部歳入歳

出予算(案)」、「常議員の互選について」、「札幌別院宗祖親鸞聖人御誕生850年立教開宗800年慶讃法要並びに創立160年記念法要について」の4議案であり、常議員に中村吏議員が互選されたほか、全ての議案が原案通り可決された。

2025年度経常部決算 歳入の部

総額 407,498,795円

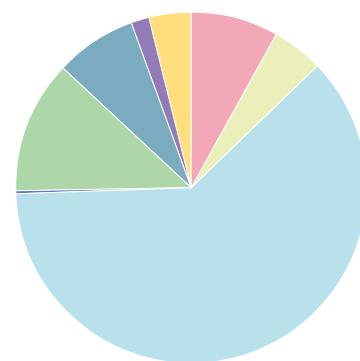
法務収入	¥90,250,500
法要収入	¥11,581,997
諸懇志	¥133,595,436
支院回付受金	¥111,241,131
諸回付受金	¥16,074,085
繰越金	¥44,755,646



2025年度経常部決算 歳出の部

総額 380,585,631円

寺務費	¥31,607,670
維持費	¥17,815,841
給与費	¥234,367,204
会議費	¥1,172,234
庶務費	¥46,825,320
負担金	¥28,337,362
事業助成金	¥5,860,000
積立金	¥14,600,000
予備費	¥0



東西二人会開催

7月4日13時30分より大谷ホールにて落語会「東西二人会」が開催された。この催しは岩見沢市の廣隆寺、千歳市の真光寺、当別町の大成寺と共催で、落語協会顧問の柳家さん喬氏、上方落語の露の新治氏をお招きして別院含む4ヶ寺を会場に落語を公演していた。



曉天講座

7月1〜3日の日程で曉天講座が開講され、今年は尾畑文正氏(元同朋大学学長)に「淤泥華に思うく濁世の只中に念仏あり」という講題でお話しいただいた。(法話要旨は11月号に掲載予定) 早朝の涼しさの中、延べ150名ほどが参詣してご法話に耳を傾けた。

また今年も7月1日から「おあさじ50日参拝運動」がスタート。協賛社の協力によって配られたサンドイッチと牛乳の軽食を手にしつつ、参詣カードにスタンプを押して帰る方の姿も見られた。

夏まつり報告



ひがほん夏まつり(7/5 現来寺・7/11 本院)報告

7月5日、初夏の日差しが降り注ぐ中、今年も「現来寺支院夏まつり」が開催された。今年は食べ物コーナーにフライドポテト、チキンナゲット、ワッフル、かき氷等が用意された。ゲームコーナーには恒例のくじ引き、輪投げ、水中コイン落とし等があり、会場には参加者の世代を超えた笑顔があふれた。まつりの締めくくりには、北翔大学教育文学部教育学科音楽コースの学生たちによ

る金管アンサンブルの素敵な演奏が披露された。また7月11日には大谷ホールにて「ひがほん子ども夏まつり」が開催された。遊びコーナーには射的や輪投げ、キャラクターすくい、水中コイン落としゲームなど多くの出し物が用意された。たくさんのお子もたちが来場し、会場は終始賑わいを見せ、今年も盛況のうちに夏まつりを終えた。



雲龍柳

うんりゅうやなぎ

毎年必ずやってくる酷暑の8月、とりわけ6日・9日、15日は周知の通り、人類史上初の原爆投下と終戦の日である。今年には広島に121ヶ国の人びとが参加して、核廃絶を叫び平和の大切さを心に刻み、誓いを新たに世界に発信した。高市総理は広島で「非核三原則は堅持している」として将来への言及を避けた。2026年中の安保関連3文章改定に意欲を見せる動きが気になっている。幸せを願う心そのものが最悪のシナリオの既成事実化とならねば良いがと思う。私の杞憂に終わればよいのだが▼熊本では10年前の地震から復興が果たせないこの時期に、又、震度7の地震が発生した。観測史上九州初の40度を超える酷暑の中、被災者の皆様の心痛を思うと胸が締めつけられる。インフラの整備はどこまで進んだのであろうか? ゆっくり睡眠は? どうかいのちを大切にしたいと願うばかりである。この何十年、東日本大震災を始め地震が多発しているように思う。自然の摂理には手も足も出ない▼宗祖のお生まれになった平安時代も地震、疫病、つむじ風、大火事などの災難が連続して発生している。古来、人々は何を拠りどころにして生き抜いてきたのであろうか? わたしたちが生きている世界は国家であり市民社会である。その内実は「強きものが弱きを伏す」つまり権力社会である。強きものが創り上げ、幅を利かせる社会には、休んずる世界はない。国家や権力者には全く反省が縁遠い。「過ちは繰返しませぬから」との誓いは何処へ行ったのか、寂しい限りである▼わが身一つを自己として、世界として生きるのではなく、私の中に「私たち」がいるという世界観を取り戻す、ともに一つの「いのち」を生きるこの大切な尊さを思わずにおれない。いよいよ本願の呼び声が懐かしい。

お寺さんに

聞いてみよう！

新盆とは？

Q.

7月に亡くなった親族が中陰中にお盆を迎えるのですが、この場合、新盆は今年ですか？それとも来年ですか？

A.

浄土真宗ではそもそも新盆のための特別なお飾りやお供えというものはありません。なぜなら、他の宗派とお盆のお迎えする意味合いが異なっているからです。一般的にお盆とはお盆の期間中、娑婆世界に戻ってくるご先祖のために追善供養をする行事と捉えられているのではないのでしょうか。ちなみにその考えをする宗派では、中陰中は新盆にあらず、その次の年が新盆になるのだそうです。

しかし、浄土真宗ではお盆をご縁に、お寺やご家庭のお内仏、お墓や納骨堂にお参りすることを通して、亡き人を偲びながら、仏様の教えに耳を傾けることを大事にしております。これはお盆の語源が「うらぼん孟蘭盆」であることに由来しています。この言葉は「ウルランバナ」というサンスクリット語の読み漢字を当てた言葉で、もともとの意味は「木に逆さまに懸けられている」ということを表し、非常に苦痛であることを喩えています。これは私たちのあり方が、仏様の教えや願いと

真逆のあり方をしていて、そのことによって苦しんでいるということを教えています。

考えてみますと、私たちのいのちのご先祖があって初めて生まれてくることができたのちですが、普段私たちはそのことを忘れ去り、蔑ろにして生きています。そしてそのことによって自らの人生に意味や尊さを見出せずに悩み苦しむということがあるのではないのでしょうか。

ですから、浄土真宗のお盆は亡き方を偲ぶことを通して仏法を聴聞し、自らのあり方を見直す期間としているのです。直近に亡くなった方がいないに関わらず、毎年のお盆のお参りを大事にしていればよろしいかと思います。



今月のことば

悪口を言いながら

その人に親切を尽くしている。

人間というものは面白いものだ

「悪口を言いながらその人に親切を尽くしている。人間というものは面白いものだ」

仏教者の毎田周一まいだしゅういちさんの言葉です。悪口が出るということは、その相手に何かしら思いを持っているということです。その思いが強ければ強いほど「こうあってほしい」という願いも大きくなり、その通りいかなかった時には悪口という形でそれが現れ出るということもあります。

他人であればその親切に終わりがあられるかもしれませんが、家族、特に親子という間柄であればそこに限りはありません。娘たちへの「もう登校時間に間に合わないよ」の朝の声かけから始まり、「もういい加減に寝ないと明日の朝つらくて大変だよ」の夜の声かけまでが毎日のルーティーンで、翌朝振り出しに戻ります。毎日同じことを言わせないでほしいと叱りつけますが、言いつけを守らないから

もう叱らない、とはならないわけです。ついつい悪口が出るようになって、我が子のためにと接する。これだけあなたのことを考えてあなたのためにこうしている「のに」、どうして言う通りにしてくれないのだろう。「のに」がつくのが人間ですが、単純な損得だけではない人間関係の不思議さというものがあるような気がしています。

これを書きながら、帰宅してからのルーティーンを頭に浮かべてため息の漏れる私であります。

高源 唯彰





第 11 話

芸術の秋



7月11日(土)、東本願寺札幌別院で開催された「ひがほんっ子も夏祭り」に参加しました。この夏祭りは、東本願寺系列の幼稚園や、東本願寺札幌別院で活動するガールスカウト・ボーイスカウトが協力して企画・運営した催しで、多くの子どもたちや家族連れでにぎわいました。

ボーイスカウトでは、6月28日のカブスカウト集会で、会場に飾るトーテムポールを製作しました。当日は受付の横に展示され、来場者を迎えるシンボルとして会場に彩りを添えました。

夏祭りは御輪番の開会宣言で始まり、ボーイスカウトは「イライラ棒」と「キャラクターすくい」のコーナーを担当しました。スカウトたちは来場した子どもたちと一緒に遊び方を説明したり、景品を渡したりと、それぞれ役割を果たしました。交代の時間には他のブースを回ってゲームやスタンプラリーを楽しみ、会場全体で交流を深めることができました。

ゲームやスタンプラリーに笑顔!!

BS・GS活動報告



最後は旧御堂と本堂をお参りし、スタンプラリーを達成した参加者には記念のメダルが贈られました。スカウトたちにとっても、奉仕活動を通して多くの人とふれあい、仲間と協力する大切さを改めて感じる、思い出深い一日となりました。

ボーイスカウトでは新入隊員を募集中です。興味を持たれた方は、ぜひ別院まで、お問い合わせください。



門徒のおしごと

北海道産酒 BAR かま田

すすきの駅から徒歩3分、MYプラザビル8階にある「北海道産酒BAR かま田」を紹介する。酒屋生まれ酒屋育ち、SSI認定酒匠^{さかしやう}を始めとして、多くのお酒に関する資格をお持ちのオーナー「親びん」こと鎌田孝さんのもと、2011年にオープンしたお店である。夜景を楽しめるカウンター席を含めて最大で37席を有するお店の特徴は何と言っても、お店の名前の通り北海道の地酒である。店内4台の冷蔵庫に道内17蔵全てを揃え、「蔵元直送」「蔵元特約店」「蔵元訪問仕入れ」を駆使し蔵元限定、地域限定、季節限定、本数限定のレアなお酒が多数メニューを占めている。オーナーが選別する「本日のお勧め」や「本日の飲み比べセット」も大人気だ。他にも道産のクラフトビール、ワイン、ウイスキー、焼酎等は300種類以上取り揃えており、北海道産のお店に無いお酒はほんの一握りである。また、お酒の肴も一番人気のエゾ鹿の炙りを始めに充実しており、メインの素材や野菜は必ず道産を使用するこだわりぶりである。お酒の種類が多すぎて選べない・・・そんな方も大丈夫!ホールスタッフはすべてお酒の資格を持つプロばかり。きつとあなたにピッタリの一杯を選んでくれるはず。大人の隠れ家として、一次会での利用、予約をすれば貸し切りもできる、是非一度訪れてみてはいかがでしょうか? 集まれ飲兵衛!

北海道産酒 BAR かま田

〒064-0804
北海道札幌市中央区南4条西4丁目14-2 MYプラザビル8F
【営業時間】18時～25時※日祝は24時まで
(フードラストオーダー1時間前、ドリンクラストオーダー30分前)
【定休日】不定休
【公式サイト】<http://dosankosyocyu.com/>

【系列店】

〒064-0804
札幌市中央区南4条西4丁目14-2 MYプラザビル6F
446 YONYONROKU (ヨンヨンロク)



法話

南無阿弥陀仏の信心の内景

本日は永代経・物故者追弔法要です。始めに『仏説観無量寿経』というお経をいただきました。その後、「正信偈」がお勧めされましたね。お経とは、お釈迦様が説かれた教えです。親鸞聖人が大事にいただかれたお経を『浄土三部経』といいます。この三部経の内容を簡単に申し上げると「本願を信じて念仏を申し浄土に生まれたいと願いなさい」となります。そして「正信偈」は、親鸞聖人が「ああ、お釈迦様の教えが、わかりました」と領いた感動が内容となっています。「正信偈」は「帰命無量寿如来、南無不可思議光」から始まりますが、これは「南無阿弥陀仏」ということです。親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」をこの二つの言葉で表現してくださいました。

「帰命無量寿如来、南無不可思議光」、これは頭が下がるという意味です。本日の法要でもご輪番が何度も何度も礼拝をしておられました。真宗のご法要は亡くなった方をご縁にして仏様の教えを聞かせていただく場と云われてきました。それは、先ほど申し上げた「本願を信じお念仏を申し浄土に生まれたいと願いなさい」と亡き人から呼びかけられているのです。そのお声を聞かせていただく。それを聴聞とか聞法とかと言ってきました。そしてその声、具体的には教えですね。その教えが自分の身に響いた際に、「南無阿弥陀仏」と頭が下がる。それは「自分が自分が」と、自分を中心にした物差しを常に振りかざして、そのことにさえ気が付かずに自分が正しいと思っ、他人も自分も傷つけている。そのことが、仏様からの呼びかけによって、

のは排除してより良い自分になろうと努力します。このことは人間として当たり前のことですが、「果たしてそれだけで、人生本当に満足できますか」と問いかけてくださるのがご信心なのです。とれだけ求めて努力しても必ず間に合わなくなる時が来ます。どうにもならない問題に直面した時に、どうにか間に合うように頭に火がついた時のように右往左往します。事実が事実として受け取れないのです。それを迷いというのです。

お寺の近所に常日頃からご信心ということを大切にしてくよくご聴聞に来られるおばあさんがいました。しかしわずか2年の間にそのおばあさんの身内が4人も亡くなってしまったという出来事がありました。その時そのおばあさんは不安を感じられたのか、「ご祈禱でもしたほうがいいのだろうか」とお寺にご相談に来られました。あれほどご信心ということを大切にして熱心にご聴聞されていたおばあさんでも、人生の大きな問題にぶつかったときにそれが吹っ飛んでしまうのですね。それが人間からの信心です。

南無阿弥陀仏のご信心

私たちは仏教を聞かせていただいても「あれでよかったのだろうか、これでいいのだろうか」と常に迷いますね。そういう身を生きています。それは人間の信心を以て、自分で選んでいるから迷うのです。そのため仏様は迷ってばかりいる私たちに對して、正しい信心になって仏様の世界に導こうとされているのです。選択本願と言います。自分で選んで迷って、自分の選んだ結果もひきうけられない。だから仏様の方から選んでくださっている。選択本願。人間の信心が頼りないということをお念仏を通して教えてくださる。それが阿弥陀様のはたらきで

はからずしも知らされる。ですから、仏様の呼びかけを聞きえたということが、お念仏の内容になります。「南無」とは、五体投地です。全身全霊をかけた敬いの心をいいます。ですから、浄土真宗のご法要は、亡き人から「南無」する心をいただく場であると申し上げたいのです。

人間の信心

蓮如上人の御文さまをいただくと、「ご法要にお参りされた方々はお願いですから信心を獲得してください」と口酸っぱく言われます。浄土真宗という仏道はご信心をいただければ、そのご信心によって仏様になる道が開かれるのです。それが念仏して浄土に生まれなさいという、「南無阿弥陀仏」の呼びかけの意味なのです。

「信心の内景」という講題を上げさせていただきました。信心の内景―中身―とは仏様の教えにびったりと領くことなのです。難しい言葉で、仏教と相応するといっています。それが信心の内景です。それは仏様に「お前は逆さまに生きているぞ」と、人間の信心は逆さまなのだと思われ、私たちは自分を中心にして善悪をつけ、自分に都合のいいものは、貪り続けるのです。食欲といいます。そして、都合の悪いことはあっち行けという、鬼は外・福は内の心で生きています。自分にとって都合の良いものは自分の方へ、悪いも

あり、南無阿弥陀仏のご信心なのです。親鸞聖人は、その仏様からの信心を「正信」とか「賜りたる信心」と、人間の信心と分けて表現されていますね。

私たちは自分のことをよくわかっていないつもりですが、本当はわかっていません。そのことを知らせていただくことがご信心の智慧の内容です。したがって、「自分を中心にしてあべこべに生きていませんか」と私たちは南無阿弥陀仏を通して呼びかけられているのです。その呼びかけを聞かせていただくことが法要の要となります。聞かせていただくことは仏様のお心、本願に遇わせていただくということです。本当に仏様に遇うことができたならどんなものにも南無する心が私の中に起きます。親鸞聖人は、それは不可思議なことだと「帰命無量寿如来、南無不可思議光」という形で仰っているわけです。ですから「南無阿弥陀仏」と頭が下がるまで聞法してご信心を確かめていくことが大切なのではないかと思ひます。



雲井 一久（くもい かずひさ）

神奈川県 真照寺

本稿は2026年6月の

札幌別院永代経・門徒物故者追弔法要の法話要旨です。

念仏成仏是れ真宗

こだま ぎょうよう
児玉 暁洋

児玉暁洋は昭和から平成にかけて活躍した僧侶であり仏教学者である。また、教育者や社会運動家としても活躍した人物である。その活動の全ては真宗念仏を基礎とした生き方であった。

求道のはじまり

昭和6年、岐阜県安八郡神戸町の医師家系の家に生まれた暁洋は、戦中戦後の混沌とした時代に青年期を過ごし、日々移ろう国家思想に大きな葛藤を抱くようになる。昭和22年、戦時下に將軍の軍医大尉まで勤めた祖父が急死したことをキッカケに「死」という逃れがたい事実と直面し、自分もいずれ死ぬならば、今日が満ち足りる生き方はないのかと思い至り、学校へ行かずに本を読み漁り、答えを探す日々をはじめた。

光顔巍々～暁烏敏との出遇い～

そんな時、後の師となる暁烏敏が近所のお寺に説教に来ることがあった。祖母が熱心な門徒であった事、先述した自身の求めもあり、聴聞に足を運ぶ。そこに見た敏の姿と言葉に確かなものを感じた暁洋は猛反対する父を説得し、高校を中退して、敏が預かる石川県明達寺に入門し、得度をして釋 暁洋の法名を授かった。

おかれた場所で咲く

仏門に入った暁洋は金沢大学や大谷大学で学び直し、卒業後、信國淳より声が掛かり大谷専修学院の職員として勤務。以来26年に渡り、学生たちと共に真宗の生活を送る(晩年、還浄する年まで非常勤としても勤務)。昭和60年からは本山教学研究所において所員、所長を歴任する。

名告りと覚悟

実は里村保という名で生を受けたが、娘が伯父の家に養子として入る際、家族皆で迎えられる事となり、児玉姓となった。筆名としても使用している暁洋の名は「日本人として念仏するのではなく、念仏者として日本人の業を生きるものであります。」という覚悟の意味があるという。

末弟としての志事

師 暁烏敏の戦時教学の責任を、遺された末弟として生涯背負った暁洋は、靖国問題をはじめ多くの社会問題に真宗教学の立場から積極的に関わった。「第十八願に乗じて、第一願に生きん」(仏の本願力をもって地獄・餓鬼・畜生を超えていく)道を唱え続けたのである。

児玉 暁洋 (1931～2018)

岐阜県に生まれる。1948年石川県明達寺に入門
昭和末期～平成に活躍した真宗大谷派僧侶・仏教思想家
1990-1995年真宗大谷派教学研究所所長



児玉 暁洋 (本山より提供)

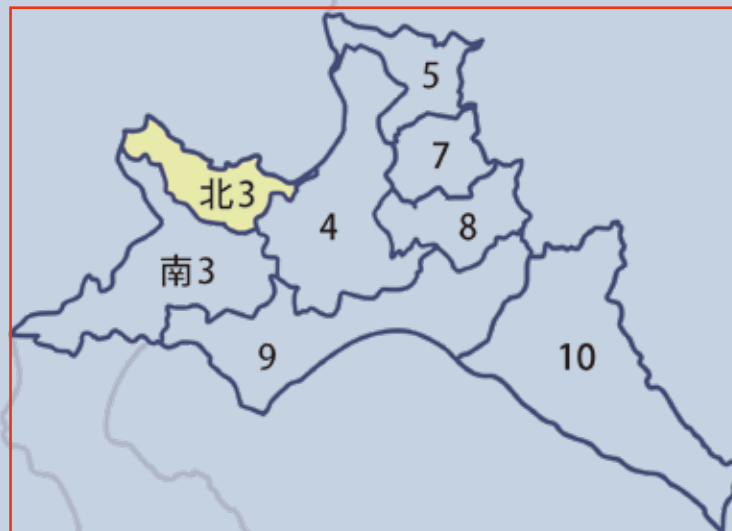
著 / 教区駐在教導・宇都宮 力

無盡蔵

崇敬区だより

海とともに生きる町 古平

心のふるさと



北海道の日本海側に位置する後志管内古平町は、海と山に抱かれた静かな町であり、港へ向かう道を歩くと、潮の香りが風に乗って漂い、漁船のエンジン音が遠くから聞こえてくる。派手な観光地ではないが、そこには昔から変わらぬ暮らしの息づかいがある。

古平といえば、たらこやニシンなど海の幸を思い浮かべる方も多いであろう。厳しい冬を越え、春を迎え、短い夏を過ごし、再び秋の漁へ向かう。その繰り返しの中で、人々は自然の恵みとともに生きてきた。海が荒れれば仕事は休みとなり、豊漁の年もあれば不漁の年も当然ある。人の力だけではどうにもならない自然の大きさを、古平の人々は日々感じながら暮らしている。

古平に十数年暮らして感じるのは、「あたりまえ」の尊さである。朝になれば港に船が並び、夕方には



家々に明かりが灯る。その何気ない風景は、決して当然ではなく、多くの人の働きと支えによって成り立っている。仏教では、私たちはさまざまな縁によって生かされていると教えらる。海の恵み、家族の支え、地域のつながり等々、古平の暮らしを見ていると、その教えが実感として伝わってくるように最近感じる。

近年は人口減少や高齢化が進み、地方の町には多くの課題がある。しかし、古平には人と人との距離の近さがある。寺院の諸法要、神社の例大祭、地域の集まりで顔を合わせ、互いを気遣いながら暮らす姿は、人とのつながりの希薄化が叫ばれる現代にこそ大切なことではないだろうか。

海を眺めていると、波は絶えず形を変えながら岸へ寄せてくるが、人の歩みもまた同じように、喜びや悲しみを繰り返しながら流れていく。その中で、立ち止まり、ふるさとの風景に心を向ける時間は、私たちに静かな安心を与えてくれるのではないだろうか。

海は、今日も変わらずそこにあり、その穏やかな風景に触れるたび、人は「生かされている」ということを、あらためて心のふるさとかから教えられるのではないだろうか。



北第3組

寶海寺 照山 大暁

津波により6歳で亡くなった西城春吉さんを18歳に成長させて、現在の家族と一緒に描いた1枚(宮城県石巻市)



佐々木るりさん(福島県二本松市眞行寺坊守)



今号より2025年札幌別院報恩講で「ダキシメルオモイ展」の展示と講演をいただいた小林憲明さんにコラムをご執筆いただきます。作品をご紹介しますとともに当時の思いを語っていただきます。

ダキシメルオモイ 14年の活動

2012年、東日本大震災をきっかけに始まった「ダキシメルオモイ」プロジェクトは、被災地で生きる家族の声に耳を傾け、その想いを麻布に描き残す活動です。原発事故への不安の中、子どもを守ろうと懸命に暮らす福島県二本松市の眞行寺(真宗大谷派)の坊守さまを描いたことから始まりました。目に見えない放射性物質と向き合い、食べ物を測定し、通学路をお母さんたちで除染しながら日常をつないでいく姿に触れ、これは福島だけの問題ではなく、同じ日本に暮らす私たち全体の問題なのだ強く感じました。子どもを想う気持ちは、ここに暮らしていても同じ。そのオモイを分断ではなく共有したいと願い、被災地と全国の家族を描き、絵を囲むように展示を続けてきました。

やがて、津波で子どもを亡くした家族や、全国へ避難した家族とも出会いました。残された1枚の写真を手がかりに、亡くなった子どもを現在の家族とともに描くこと。成長した姿で描いてほしいという願いに向き合うこと。そこには正解のない問いがありました。取材では意見を挟まず、

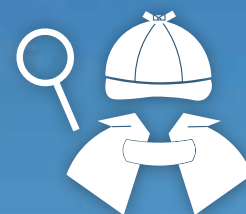
ただ静かに耳を傾け8時間を超えることも。言葉の奥にあるオモイを受け取り、絵にしていきます。描くことの7割は、「聴くこと」。

14年間で500家族を取材し、300家族を制作しました。活動の途上で自身も病に倒れ、身体の限界を知りました。それでも、子どもを想う気持ちは、場所や立場を越えて必ずつながると信じています。

一枚一枚の絵は、小さな灯りです。その灯りが少しずつ集まることで、分断ではなく共有へ、忘れないという力へと変わっていくことを願いながら、これからもさまざまな家族のオモイを描き続けていきます。



著 / 小林憲明



すすきの探訪ツアー

酷暑が続くなか、自由民権運動への私の熱も冷めやらない。講演や執筆活動は、このテーマが中心だ。約百四十年前、北海道の開拓移民たちも、自由と自治を求める情熱に燃えていた。

札幌の自由民権運動は、狸小路二丁目の東座を舞台に始まり、やがて薄野遊郭へと広がった。当時の劇場は、人々が時代を語る「街の論壇」でもあった。

明治二十年八月二十八日、東座で開かれた阿部午之助の演説会では、「圧政は何れより生ずるや」「女性教育の振るわざる原因」が論じられた。圧政や女性教育を論じる演題には、時代の息吹が感じられる。

民衆はさらに開かれた場を求め、成田山新栄寺の仮安置所までもが政談演説の会場となった。この運動を支えたのは、札幌の交通体系を築いた先駆者・助川貞二郎や、東座を立花座へ改め、大黒座とともに札幌を代表する劇場へ育てた伊藤辰造ら、札幌の商工業者たちである。彼らは「自らの街は、自ら治めるべき」との思いで、自治の実現を訴えた。

明治二十四年八月十日、自由党総理・板垣退助が北海道遊説で札幌を訪れると、薄野の大黒座には二千人を超える聴衆が詰めかけた。板垣は「地方議会開設後の警告」を演題に掲げ、議会は設けるだけではなく、その権限こそ重要であると訴えた。

この願いは札幌から全道へと広がり、北海道の礎となっていく。この運動が育んだ政党政治の流れは、後の政党史へと受け継がれ、自由民主党にもその系譜を見ることができる。

酒席では「政治と宗教と野球の話はするな」とよく言われる。しかし明治の薄野では、酒席の傍らで北海道の未来を語る議論が熱く交わされていた。歓楽街・薄野には、北海道の民主主義を育んだ「言葉の記憶」が今も静かに息づいている。



著 / 民衆史研究家 石川圭子



▲「大黒座」の遺跡
一豊川稲荷札幌別院玉宝禅寺の玉垣



▲《大黒座》出典：さっぽろ文庫49
札幌と映画



▲水天宮敷地内にある立花座の遺跡



おあさじ

朝 6 時 30 分から

毎日どなたでも

お参りいただけます

永代経・寄贈披露

尊い浄財及び寄贈を賜りました。
ここに披露申し上げます。

○永代経

【本院】

宮下 和広 様 中央区

【北支院】

瀬川 京子 様 白石区

大西 実也子 様 西区

山田 齊 様 中央区

國母 ハル 様 豊平区

佐々 木久美 様 白石区

山形 貞子 様 北区

野村 真奈美 様 中央区

宮崎 聡 様 中央区

小山 恵子 様 東区

【現来寺支院】

高田 幸子 様 北区

永坂 裕子 様 北区



表紙紹介

Title

コスモスの中で(札幌)

Photo

菊池 恵子



関 逸 也

退職にあたって

この度、真宗大谷派帯広別院の輪番に就任することになり、7月末日をもって退職いたしました。

ご門徒の皆様をはじめ、諸先輩方にご指導頂きながら33年間無事に勤める事ができ、心より感謝申し上げます。在職中は多くの事を学ばせて頂き充実した別院生活を送ることが出来ました。

私は教化部門主幹並びに機関紙編集長を担当しておりました。昨今は寺離れ、宗教離れと言われる風潮の中でお寺が出来る事として「心・生きがい・WEB（広報）サポート」の充実を目指し教化に携わってききました。その教化の一環としてこの機関紙もタブロイド紙から手に取り読み易い雑誌形式に変更しました。

今後も札幌別院の機関紙「さっぽろ東本願寺」がお寺とご門徒を繋ぐ一つの架け橋になればとても幸いなことであります。

秋季彼岸会

◆日にち：9月20日(日)～23日(水)

◆時間：全日13：30～

◆場所：札幌別院本堂

◆講師：20日～22日 小川如俊(江別市 大恩寺)

23日 酒井 智(南富良野町 恵光寺)

◆無量寿堂総経：23日 勤行に引きつづき本堂に於いて

各支院 秋季彼岸会・永代経法要日程

北 支 院 9月22日・23日 13:00～ 照山 大智(小樽市 教照寺)

北三条支院 9月20日・21日 13:00～ 仁禮 秀嗣(木古内町 圓照寺)

豊 白 支 院 9月20日・21日 13:00～ 新保 宗之(苫小牧市 不退寺)

円 山 支 院 9月22日 13:00～ 菊地 得典(湧別町 聖明寺)

23日 12:30～ 菊地 得典(湧別町 聖明寺)

山 鼻 支 院 9月20日・21日 13:00～ 金石 潤導(黒松内町 開正寺)

現来寺支院 9月22日・23日 13:00～ 府録 雄司(利尻富士町 本浄寺)

札幌別院報恩講

◆日にち：10月23日(金)～28日(水)

◆場所：札幌別院本堂

◆講師：23日～25日 高名 和丸(青森県 正行寺)

26日～28日 狐野 秀存(元大谷専修学院学院長)

※法要の時間については法要パンフをご覧ください。

テレホン法話☎ (011)511-1313

9 月 愚禿親鸞 10 月 わがまま

飯尾 哲也 阿部 正信

『つきあかり 東別院テレホン法話集』より

9 月	10月	11月
1日 (火)	1日 (木)	1日 (日)
2日 (水)	2日 (金)	2日 (月)
3日 (木)	3日 (土)	3日 (火)
4日 (金)	4日 (日)	4日 (水)
5日 (土)	5日 (月)	5日 (木)
6日 (日)	6日 (火)	6日 (金)
8日 (火)	8日 (木)	8日 (日)
	9日 (金)	
	10日(土)	
11日(金)	11日(日)	
12日(土)	12日(月)	12日(木)
13日(日)	13日(火)	
	14日(水)	
20日(日)		21日(土)
21日(月)		22日(日)
22日(火)		
23日(水)	23日(金)	
	24日(土)	
25日(金)	25日(日)	
26日(土)	26日(月)	
27日(日)	27日(火)	27日(金)
28日(月)	28日(水)	28日(土)
		29日(日)